

200401041A

厚生労働科学研究研究費補助金
医療技術評価総合研究事業

医療・看護事故（インシデントを含む）をエビデンスにした
看護技術の標準化に関する研究

平成 16 年度 総括研究報告書

主任研究者 川嶋 みどり

平成 17（2005）年 4 月

目 次

はじめに	1
第1章 研究目的	3
第2章 医療・看護事故の観点からみた基礎看護技術テキストの批判	5
第3章 医療事故をエビデンスとする看護技術教育に関する文献検討	23
第4章 臨地実習における学生のヒヤリ・ハット体験についての実態調査	31
1. はじめに	31
2. 研究方法	31
3. 結 果	32
4. 考 察	49
第5章 まとめと今後の課題	51
謝辞	55

はじめに

社会の変化や国民のニーズに対応する看護への期待の高まりに応じて、安全な看護技術を提供することは、今日の看護専門職に課せられた社会的責務であり、看護基礎教育における安全で確実な看護技術の習得は必須の課題である。臨地実習においても学生の看護技術の実施の際には、患者の同意、安全性の確保が第一に求められ、その意味からも看護技術教育の基準（教育内容・教育方法・教育教材の開発を含む）を安全性の確保という視点から明確にすることの必要性はきわめて高い。「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会」の報告書（平成15年3月）では、臨地実習において学生が行う基本的な看護技術の考え方、看護技術の実施水準を1～3に分類した。しかし、この水準については同じ技術項目であっても患者の状況によっては安全性の確保が難しい場合も生じるため、技術項目のみで水準を設けることに対する批判もある（茂野，2003）。したがって、当該検討会が提示した水準に加えて、各々の看護技術項目について、過去の医療・看護事故（インシデントを含む）をエビデンスとして検討を加え、さらに学生の技術習得の発達段階の特徴等を踏まえた看護技術教育の標準化を図ることが求められる。そこで、本研究は、研究課題を「医療・看護事故（インシデントを含む）をエビデンスにした看護技術の標準化に関する研究」とし、これまでに蓄積された看護技術教育と医療・看護事故のエビデンス及び医療事故予防教育に関する知見を統合した新しい看護技術基準を作成することを特色とし、研究に取り組んだ。本報告書の構成は、「はじめに」「第1章 研究目的（分担執筆：吉田）」「第2章 医療・看護事故の観点からみた基礎看護技術テキストの批判（分担執筆：吉田・守田）」「第3章 医療事故をエビデンスとする看護技術教育に関する文献検討（分担執筆：本庄・川原）」「第4章 臨地実習における学生のヒヤリ・ハット体験についての実態調査（分担執筆：佐々木・村上）」「まとめと今後の課題（分担執筆：川嶋）」となっている。

研究組織 主任研究者：川嶋みどり（日本赤十字看護大学 教授）
分担研究者：守田美奈子（日本赤十字看護大学 教授）
本庄 恵子（日本赤十字看護大学 助教授）
川原由佳里（日本赤十字看護大学 講師）
佐々木幾美（日本赤十字看護大学 講師）
吉田みつ子（日本赤十字看護大学 講師）
村上 睦子（日本赤十字社医療センター 副看護部長）
研究協力者：奥田 清子（日本赤十字看護大学 助手）
菊岡 祥子（日本赤十字看護大学 助手）
杉田 久子（前日本赤十字看護大学 講師）
田中 孝美（日本赤十字看護大学 助手）
力石 陽子（日本赤十字社）

第1章 研究目的

本研究は、看護師免許取得者が持つべき基本的看護技術とは何かを明らかにし、それらの看護技術が、何よりも安全に行われるために必要な要件を個々の技術毎に検討して、看護基礎教育における看護技術教育の標準化を図ることを目指している。

社会の変化や国民のニーズに対応する看護への期待の高まりに応じて、安全な看護技術を提供することは、今日の看護専門職に課せられた社会的責務である。そのため、看護基礎教育における安全で確実な看護技術の習得は必須の課題である。臨地実習においても学生の看護技術の実施の際には、患者の同意、安全性の確保が第一に求められ、その意味からも、看護技術教育の基準を技術内容の安全性の確保という視点から明確にすることの必要性はきわめて高いといえる。

「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会」の報告書（平成15年3月）では、臨地実習において学生が行う基本的な看護技術の考え方、看護技術の水準について提示され、技術レベルを、水準1～水準3に分類した。しかし、この水準については、同じ技術項目であっても患者の状況によっては安全性の確保が難しい場合も生じるため、技術項目の名称のみで水準を設けることに対する批判もある（茂野、2003）。

エビデンスを踏まえた看護技術の標準化をめざす研究成果が徐々に積み重ねられているが（岡谷、2002、川島、1996）、数多くある看護技術項目のすべてにわたって検証されているわけではない。経験的手順や経験的根拠によるものも未だ多く存在したまま、看護技術教育が行われているのが実情である。よって安全性の高い看護技術教育を行い、実践能力の高い看護専門職を育成するためには、看護技術の経験的根拠を検証することに加え、これまでに蓄積された医療・看護事故やヒヤリ・ハット事例分析（川村、2003）からの学びを生かし、看護技術教育に取り入れていくことが求められる。しかし、これまでの我が

国の看護技術に関するテキストは、医療事故防止の観点から構成したものではなく、看護技術教育と医療事故防止に関する教育が系統的に行われてきているとはいえない。丸山（2001）は、看護における事故防止のために必要な看護基礎教育カリキュラム、看護教員に必要な知識について検討しているが、今後は、看護技術の安全性の確保を基軸とした看護技術の標準化を図ることが求められる。

したがって、本研究は看護基礎教育における看護技術教育を安全性の視点から検討し、これまでに蓄積された看護技術のエビデンスと医療・看護事故予防に関するエビデンスを統合し、看護技術教育における基準（教育内容・教育方法・教育教材の開発を含む）を作成することを目的とした。平成16年度は、具体的に、以下の計画に基づいて実施した。

- 1) 既刊の基礎看護技術テキストとして採用されているテキストについて、看護技術項目毎の内容（構成要素、手段、手順、根拠となるエビデンス）を抽出、現時点の標準的手順及び検証されているエビデンス、必要なエビデンス等について検討する。
- 2) 各看護技術項目を、過去に起きた医療・看護事故／過誤事例と対比させながら内容を吟味し、安全性の高い技術への方策を検討する。
 - (1) 既に明らかにされているエラーマップ（川村、2003）と対比させ、看護技術項目毎の知識・手順と照らし合わせる。
 - (2) 臨地実習場面における看護学生の医療事故、ヒヤリ・ハット（ニアミス体験）体験調査を実施し、各看護技術項目の手順に照らし合わせ、内容、原因、防止策について分析する。

平成17年度以降は、上記の結果を踏まえ、看護学生が体験するヒヤリ・ハット事例のうち、頻度の高い看護技術項目について、看護行為の課題分割の実態・メタ認知力（自己モニタリング機能と自己コントロール機能）の

実態についてデータ収集・分析を行い、安全性の確保という視点を踏まえた看護技術の標準化を図るための看護技術基準案（教育内容・教育方法・教育教材の開発を含む）を作成する計画である。

文献

厚生労働省：看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会の報告書（平成15年3月）。

茂野香おる（2003）「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」を読んで、看護教育44(8)、644-647。

岡谷恵子（2002）根拠に基づく看護技術のデータベース化に関する研究。厚生科学研究費補助金 21世紀型医療開拓推進研究事業平成13年度総括・分担報告書。

川島みどり／菱沼典子編（1996）看護技術の科学と検証、別冊ナーシング・トゥデイ No.9 日本看護協会出版会。

川村治子（2003）ヒヤリ・ハット11,000事例によるエラーマップ完全本。医学書院。

丸山美知子（2001）厚生科学特別研究事業「看護・医療における事故防止のための看護基礎教育に関する研究」平成12年度研究報告書。

第2章 医療・看護事故の観点からみた 基礎看護技術テキストの批判

1. はじめに

エビデンスを踏まえた看護技術の標準化をめざす研究成果が徐々に積み重ねられているが（川島、1996）、数多くある看護技術項目のすべてにわたって確認されているわけではない。経験的手順や経験的根拠によるものも多く、看護基礎教育・看護技術教育が行われているのが実情である。頻発する医療・看護事故を予防し、安全性の高い看護技術を身につけた実践能力の高い看護専門職を育成するためには、長年にわたって蓄積された看護技術の経験的根拠と医療・看護事故やヒヤリ・ハット事例分析（川村、2003）を統合し、看護技術教育に取り入れていくことが求められる。

本章では、これらを踏まえ、既刊の看護技術テキストの各技術項目の内容（構成要素、手段、手順、根拠となるエビデンス）を抽出、現時点の標準的手順及び検証されているエビデンス、今後必要となるエビデンスについて、過去に起きた医療・看護事故／過誤事例、ヒヤリ・ハット事例（川村、2003）、臨床での体験事例と対比させながら内容を吟味した。そして、今後、医療事故防止の観点からどの

ような点を加味し、再構成する必要があるかについて研究班で議論した。検討対象とした看護技術項目は表1のとおりである。

2. 医療・看護事故・ヒヤリ・ハットの観点からみた既存の看護技術テキストの検討

看護技術毎に、医療・看護事故・ヒヤリ・ハット事例を抽出し、既存の看護技術テキスト中の記載内容の傾向について、表2にまとめた。

3. 既存の看護技術テキストにおける問題点

看護事故、ヒヤリ・ハット事例、臨床における経験的事例と既存の看護技術テキスト中の記載を比較検討した結果、看護技術テキスト及び技術教育方法について、次に述べる問題点が明らかになった。

1) テキスト全体に看護事故、ヒヤリ・ハット事例の記載が少ない。

医療事故やヒヤリ・ハット事例を積極的に掲載したり、それらを踏まえた安全な看

表1 検討対象とした技術

領域	看護技術
排泄援助技術	トイレ介助、自然排尿・排便援助、便器・尿器の使い方、オムツ交換、浣腸、摘便、膀胱内留置カテーテル法（挿入と管理）、導尿、ストーマ造設者のケア
清潔・衣生活援助技術	入浴介助、洗髪、全身清拭、足浴、整容、爪切り、手浴、陰部洗浄、口腔ケア、寝衣交換
与薬の技術	経口・外用薬の与薬、直腸内与薬、皮内・皮下・筋肉注射、静脈内注射、中心静脈栄養、輸液ポンプ、シリンジポンプ
感染予防の技術	スタンダードプリコーション、手洗い、防護用具の着用医療廃棄物の取扱い、無菌操作、針刺し洗浄・消毒・滅菌
安全管理の技術	療養生活の安全確保、医療事故予防リスクマネジメント
安楽確保の技術	安楽な体位の保持、罨法等身体安楽促進ケア、精神的安寧を保つ看護ケア

表2 各看護技術の看護事故、ヒヤリ・ハット代表例と既存テキスト中の記載（その1）

領域	看護技術	看護事故、ヒヤリ・ハット例	既存テキスト中の記載
排泄援助技術	トイレ介助	トイレ移動時・排泄中の転倒・転落 トイレ移動時のチューブトラブル 怒責による循環動態の変動 トイレ動作に伴う疲労	トイレ介助を記載していないテキストがある
	腸蠕動運動促進	温度調節確認不足による熱傷	
	床上での便器・尿器使用	衣類・寝具の汚染 体位変換時の転倒・転落 不潔な便尿器を病室で使用	
	オムツ交換	皮膚障害（かぶれ、褥創） オムツ交換時の転倒・転落 股関節開排時の骨折	股関節骨折のリスクに関する記載がない
	浣腸	浣腸液と他薬剤を誤認、血便、患者死亡例 挿入時の粘膜損傷、グリセリンによる溶血 循環動態の変動	グリセリンによる溶血に関する記載が少ない
	摘便	浣腸実施後の滴便により粘膜損傷、グリセリンによる溶血 循環動態の変動	浣腸後の摘便実施のリスクについて記載が少ない。
	導尿	カテーテル挿入に伴う尿道損傷 感染	
	膀胱内留置カテーテル法（挿入と管理）	カテーテル内腔圧迫による尿の排出困難 カテーテル留置後バルンの破裂による自然抜去 蓄尿バッグの破損 バルンの固定水の抜去困難 感染	
	ストーマ造設者のケア	ストーマ周囲の皮膚障害 ストーマ合併症	基礎看護技術テキストに含まれていないことも多い
清潔・衣生活援助技術	入浴介助	浴室移動中の転倒、転落 一過性の脳虚血発作 呼吸・循環動態の変動 疲労	入浴介助を記載していないテキストがある
	洗髪	湯の温度確認不足による熱傷 衣服の濡れ・汚染 頭皮の損傷 頸部の過伸展によるめまい 無理な姿勢による筋肉疲労 呼吸・循環動態の変動 転倒・転落	
	全身清拭	清拭時の体動によるチューブ抜去 過剰刺激・石鹸分残留による皮膚機能損傷 熱傷 長時間の清拭による疲労	体動時のチューブトラブルの記載が少ない
	足浴	体位保持が不安定なために起こる、打撲や転倒 湯温の不適切さによる熱傷 ケア時のルートトラブル	
	整容：爪切り	深爪 不適切な切り方による陥入爪（巻き爪） 体位保持不安定による転落・転倒	安全な爪切りについての記載が少ない。

表2 各看護技術の看護事故、ヒヤリ・ハット代表例と既存テキスト中の記載（その2）

領域	看護技術	看護事故、ヒヤリ・ハット例	既存テキスト中の記載
清潔・衣生活援助技術	整容：整髪	整髪時の力が強すぎることによる皮膚の損傷 出血傾向時の皮膚の損傷 体位保持不十分による転倒	
	手浴	体位保持不安定による打撲・転倒 湯温の不適切さによる熱傷 ケア時のルートトラブル	
	陰部洗浄	体位保持不安定による転倒 湯温の不適切さによる熱傷 過剰刺激・石鹸分残留による皮膚機能損傷 ケア時のルートトラブル	
	口腔ケア	義歯の紛失や破損 口腔内粘膜の損傷、出血 細菌感染、他患へ細菌を媒介	
	寝衣交換	関節脱臼 衣服の破損 チューブトラブル（閉塞・屈曲） 輸液ルート再接続・再開忘れ 人工呼吸器のはずれ	チューブ類を装着した状態での寝衣交換方法の記載が少ない
与薬の援助技術与薬の援助技術	経口・内服	患者誤認による誤薬 薬剤内容の誤認 薬剤量の誤認 投与日時の誤認 患者がシートごと内服 坐薬を誤って内服	
	外用薬の与薬	眼軟膏と皮膚軟膏を誤認 点眼薬と類似した容器の内服薬を誤認 2種類以上の点眼薬の識別困難 テープ剥離時の角質損傷 テープかぶれ 高齢者の心疾患貼付薬と消炎鎮痛貼付薬の誤用	ヒヤリ・ハット、事故事例の記載がほとんどみられない。
	直腸内与薬	挿入に伴う痔出血 循環動態の変動	
	皮内注射	患者誤認による誤薬 抗生剤皮内テスト必要性の確認忘れ アナフィラキシーショック	
	皮下注射	患者誤認による誤薬 薬剤内容の誤認 薬剤量の誤認 投与日時の誤認 針刺入に伴う神経損傷 同一部位への繰り返し刺入による皮膚障害	同一部位への繰り返し刺入による皮膚障害の記載が少ない。
	筋肉注射	患者誤認による誤薬 薬剤内容の誤認 薬剤量の誤認 投与日時の誤認 針刺入に伴う神経損傷 薬剤による潰瘍形成・壊死	

表2 各看護技術の看護事故、ヒヤリ・ハット代表例と既存テキスト中の記載（その3）

領域	看護技術	看護事故、ヒヤリ・ハット例	既存テキスト中の記載
与薬の援助技術 与薬の援助技術	点滴静脈内注射	患者誤認による誤薬 薬剤内容の誤認 薬剤量の誤認 投与日時の誤認 針刺入に伴う神経・動脈の損傷 抗がん剤漏出による皮膚壊死 時間指示確認不足により、短時間で薬剤を投与 ルートトラブル（接続部の外れ・ルート屈曲）	
	中心静脈栄養	患者誤認による誤薬 ルートトラブル（自己抜去、屈曲、閉塞、接続部のゆるみ、外れなど） 刺入部からの感染（敗血症など）	
	輸液ポンプ	流量設定の間違い 2種類以上のポンプ使用時の薬剤の誤認と流量設定間違い 患者誤認による誤薬 電源の入れ忘れ	基礎看護技術テキストに含まれていないことがある
	シリンジポンプ	流量設定の間違い 2種類以上のポンプ使用時の薬剤の誤認と流量設定間違い 患者誤認による誤薬 電源の入れ忘れ シリンジのセットが不完全で、薬剤が未注入 薬剤の漏出による皮膚壊死	基礎看護技術テキストに含まれていないことがある
感染予防の援助技術	手洗い	手洗い忘れによる集団感染 セラチア菌による感染が原因と考えられる死亡例 （平成12年大阪，平成14年東京）	
	防護用具の着用	手袋のピンホールを通じた汚染 手袋・マスク・ガウン脱衣時の汚染 防護用具着用時のケア後の手洗い忘れ	ヒヤリ・ハット、事故事例の記載がほとんどみられない。
	医療廃棄物の取扱	感染性が疑われる注射針や注射筒、点滴用チューブ 使用済み紙おむつ等の産業廃棄物不法投棄事件 （平成15年青森）	ヒヤリ・ハット、事故事例の記載がほとんどみられない。
	無菌操作	不潔なまま使用 高価なデバイス滅菌物の破損	
	針刺し	C型肝炎感染、HIV感染	静脈血採血等の項目で若干記載があるのみである
	洗浄・消毒・滅菌	重篤な感染（セラチア菌：医療者の手指、ネブライザー、輸液前後の消毒綿の汚染等） 消毒剤と静脈注射剤との混同	
安全管理技術	療養生活の安全確保医療事故予防リスクマネジメント	誤薬 患者誤認 ライン・チューブトラブル 転倒転落 薬剤・放射線暴露 医療機器類取扱いに関するエラー 検査に関するエラー	安全管理技術を基礎看護技術テキスト内に独立して設けているもの少ない。

表2 各看護技術の看護事故、ヒヤリ・ハット代表例と既存テキスト中の記載（その4）

領域	看護技術	看護事故、ヒヤリ・ハット例	既存テキスト中の記載
安楽確保の援助技術	安楽な体位の保持	長時間同一体位による褥瘡発生 長期臥床者の循環動態の変化	
	電法等身体安楽促進ケア	低温熱傷 寒冷刺激による神経麻痺 循環動態の変化	
	精神的安寧を保つ看護ケア 【生活環境を整えること】 【香り；アロマセラピー】 【マッサージ】	ベッド周囲の整理整頓不足 ベッドが高すぎ、転倒・転落 過敏症やアレルギー反応 嘔気や嘔吐、否定的な感情 褥瘡の悪化	療養環境の整備が、医療事故防止の大前提であるという記述が薄い。アロマセラピー、マッサージについてテキストには含まないことが多い

看護技術手順について記載しているテキストが少なかった。近年、多くのデータが蓄積されつつあるヒヤリ・ハット事例や看護事故事例が、看護技術テキストに十分に取り入れられていない状況が伺えた。個々の看護技術の手技・手順、それらに関するエビデンス（臨床的な経験知も含む）の記載に終始しているテキストが多く、昨今の医療・看護事故関連の調査研究の発展に、看護技術テキストが十分に追いついていない印象があった。

今後、早急に看護事故、ヒヤリ・ハット事例を盛り込んだ看護技術テキストを再構成する必要がある。

2) 看護事故、ヒヤリ・ハット事例が頻発している看護技術項目自体がテキストに含まれていないものもみられた。

看護事故、ヒヤリ・ハット事例が頻発している状況に含まれる看護技術のうち、トイレ介助、入浴・シャワー浴介助、オムツ交換方法、爪切り、輸液ポンプ・シリンジポンプ取扱いについては、基礎看護技術テキストに含まれていないテキストもあった。

トイレでの排泄、入浴・シャワー浴については、基本的に自立して生活できる患者が一人で行うことのできる動作として認識されてきたために、基礎看護技術テキストに含まれてこなかったのかもしれない。排泄援助技術においては、ベッド上で寝たきり状態にある人の便器や尿器を用いた援助を冒頭に紹介しているテキストが多かった

が、実際の臨床場面では、かなり病状が悪化していてもトイレでの排泄を望む患者が多く、看護師もポータブルトイレを用いた援助や、トイレまで車椅子を使って移動をしながらの援助などを行っていることを踏まえると、臨床現場の実情と看護技術テキストに含まれる技術項目の選定が、実際に臨床現場で必要とされる援助技術と必ずしも一致していないことが明らかになった。

輸液ポンプやシリンジポンプ等の医療機器の取扱いについては、個々の機器による取扱いが異なるために、標準的なテキストとして盛り込みにくいのもかもしれない。

しかし、いずれにしてもこれらの欠落している技術項目に関する標準的方法について検討していく必要がある。

3) 看護技術項目に、【体位・移動の援助技術】が複合した場合の、看護事故、ヒヤリ・ハットの発生リスクについて強調されていない。

たいていの日常生活に関する援助には、【体位・移動の援助技術】を伴い、それによって看護事故、ヒヤリ・ハットの発生リスクが高くなることが明らかになっている（川村、2003）。つまり、清潔・衣生活援助技術（入浴、清拭、洗髪、足浴、寝衣交換）、排泄援助技術（トイレ介助・便器や尿器の使用、浣腸、オムツ交換）には、必ず、からだの向きを換えることや立位の保持、浴室までの歩行・車椅子移乗や移動などが必要である。また、医療機器の装着・管理中

の患者は、いつもベッド上で臥床しているわけではなく、日常生活上の様々な動作が付加されるため、医療機器装着中の管理は、複雑性が増すことになる。点滴スタンドや酸素ボンベ等の医療器具を使用中の患者が、からだの向きを換える、ベッドから起きあがる、車椅子に移乗する、歩行するといった移動動作が加わることによって、点滴ラインやチューブ類の閉塞・抜去、医療機器の追加操作などが生じるのである。

しかし、既存の看護技術テキストにおいて、基本となる体位・移動の援助技術方法が、清潔援助技術や排泄援助技術の中で、どのように応用・展開されるのかが、十分に記載されておらず、看護事故、ヒヤリ・ハット発生予防のために、どのような手技や手順が望ましいのかという視点での記載がなされていなかった。既存のテキストでは、体位・移動援助技術はその該当項目のみの中での記述に留まることなく、応用的技術としての重要性を再認識し、事故防止の観点から再構成する必要がある。

- 4) 各援助技術における難易度を左右する要因についての記載が乏しくまた、難易度が高い場合の手技や手順についての記載が少ない。

数多く報告されているヒヤリ・ハット事例に含まれる看護技術を検討したところ、単なる技術項目の違いによって看護技術の難易度が決まるのではなく、同じ看護技術であっても、その時の患者の病状やADL、医療器具の装着状況、周囲の状況（設備、看護師の数）との組み合わせによって、難易度が変化し、看護事故のリスクを左右することが明らかになった。

患者の病状という点では、循環動態の変動が予測される患者の場合には、浣腸、滴便、入浴、洗髪、トイレ排泄、ポータブル排泄といった看護技術には、患者の急変が起こるリスクが高かった。しかし、この点について既存のテキストでは記載が少なかった。また麻痺、知覚鈍麻、意識障害、薬剤の種類などが難易度を高め、看護事故のリスクを高める要因となっていることが明らかになった。

医療機器の装着状況では、寝衣交換を例

にとると点滴や酸素などのチューブ類を装着していない患者の場合には容易に実施できていた看護技術が、それらの要件が付加されることによって難易度が上昇し、点滴ライン、チューブの閉塞・抜去といったヒヤリ・ハットが生じるのである。

このように、同じ看護技術であっても、いくつかの要因が付加されることによって看護技術の難易度が変動し、看護事故、ヒヤリ・ハットが発生しやすいことが予測される。しかし、既存のテキストでは、予測される変化のリスク認識、その場合の対応・手技・援助方法の記載が少なかった。

- 5) 看護技術の「手順」についてのエビデンス不足

エビデンスを踏まえた看護技術の標準化をめざす研究成果が徐々に積み重ねられているが、その多くは数量的に検証可能な生理学的、解剖学的、物理学的なエビデンスである。たとえば、洗髪時の湯の温度や体位の保持のための頸部の角度についてはいくつかの調査結果が積み重ねられ、適切な温度、角度が提示されている。ところが、洗髪台の高さに合わせるために、リクライニング式車椅子の背もたれを倒した時にバランスを崩して転倒しそうになるというヒヤリ・ハット事例は、既存のエビデンスとはつながらない。つまり、看護技術の手順として、どのような順序で行為を組み立てていくことが安全な技術の提供につながるのかというエビデンスが少ないのである。

様々なヒヤリ・ハット事例をみると、生理学的、解剖学的、物理学的なエビデンスに関する知識が乏しいことに起因して発生している事例もあるが、どのような行為の手順、流れの中で実施したかが要因となっている事例も多い。従来のエビデンスという考え方の範囲内のみでは、看護技術の安全性を高めることは難しいため、看護事故やヒヤリ・ハット事例を根拠とした看護技術の手順を標準化することも、看護技術教育において重要な検討事項であると考えられる。

4. まとめ

以上の5点の検討課題を踏まえた、新しい

看護技術教育方法の開発、テキストの開発が求められる。本研究班では、同一看護技術項目について2段階の難易度を設定し、具体的な事例を展開する中で看護技術の手順や事故の起こりやすいポイントについて解説する方法を取り入れることによって、事故防止の視点から、より充実した技術教育が可能となるのではないかと考えているところである。基礎教育課程の学生が、最初から複雑な要因を含んだ状況で用いる看護技術を習得するのは困難である。あくまでも、複雑な要因を含まない状況下で、基本的な看護技術を習得できるようにし、その上で、難易度が上がる要因、それに伴う援助技術を2段階で提示し、看護事故、ヒヤリ・ハット事例を基軸とする、より安全で確実な看護技術を習得できるような工夫が必要であると考え。従来の看護技術教育に医療安全教育を統合した新しい教育方法、教材等の開発の具体的展開方法については、次年度の課題としたい。

(文責：吉田・守田)

*検討対象とした主な既存テキスト

1. 川島みどり編著 (2002) 実践的看護マニュアル、共通技術編。改訂版。看護の科学社。
2. 氏家幸子・阿曾洋子 (2000) 基礎看護技術Ⅰ。第5版。医学書院。
3. 氏家幸子・阿曾洋子 (2000) 基礎看護技術Ⅱ。医学書院。
4. 石井範子他 (2002) イラストでわかる基礎看護技術 ひとりで学べる方法とポイント。日本看護協会出版会。
5. 大岡良枝他 (1999) なぜ?がわかる看護技術 LESSON。学研。
6. 坪井良子・松田たみ子 (2002) 考える基礎看護技術Ⅰ (第2版)。ヌーヴェルヒロカワ。
7. 坪井良子・松田たみ子 (2002) 考える基礎看護技術Ⅱ (第2版)。ヌーヴェルヒロカワ。
8. 三上れつ・小松万喜子 (2003) 演習・実習に役立つ基礎看護技術 根拠に基づいた実践をめざして。ヌーヴェルヒロカワ。
9. 杉野佳江編 (2003) 標準看護学講座13 基礎看護学2。金原出版。
10. 竹尾恵子監修 (2003) Latest 看護技術

プラクティス。学習研究社。

*排泄援助技術に関する文献

【トイレ介助】

1. 藤本豊子 (1999) 尿失禁のための用具。理学療法、16(8)、633-639。
2. 排泄を考える会 (2003) 「排泄学」ことはじめ。医学書院。
3. 川村治子 (2004) 厚生科学研究費補助金「医療のリスクマネジメントシステム構築に関する研究」(平成11年~13年度)。

【腸蠕動運動促進】

1. 菱沼典子他 (1997) 熱布による腰背部温罨法が腸音に及ぼす影響。日本看護科学学会誌、17(1)、32-39。
2. 川島みどり他編 (1996) 第1章排便・排ガスの分析、第2章排便・排ガスの技術、看護の技術の科学と検証。ナーシング・トゥデイ、No. 9。
3. 米田由美子他 (1997) 腹部マッサージが腸音と排便習慣に及ぼす効果。日本看護研究学会誌、20(3)、127。
4. 川島・菱沼編、池亀・佐居著 続・看護技術を科学する 教科書チェック日常生活篇 (5) 排泄技術の文献レビュー (1) 排泄。ナーシング・トゥデイ、16(3)、58-62。

【尿器・便器使用】

1. 日本コンチネンス協会監修 (2000) 排泄関連製品・機器一覧表。難病と在宅ケア、6(2)、20-27。
2. 川島・菱沼編、池亀・佐居著 (2001) 続・看護技術を科学する 教科書チェック日常生活篇 (1) 排泄の援助技術について。ナーシング・トゥデイ、15(13)、60-64。
3. 川島・菱沼編、池亀・佐居著 (2001) 続・看護技術を科学する 教科書チェック日常生活篇 (5) 排泄技術の文献レビュー (1) 排泄。ナーシング・トゥデイ、16(3)、58-62。

【おむつ交換】

1. 日本コンチネンス協会監修 (2000) 排泄関連製品・機器一覧表。難病と在宅ケア、6(2)、20-27。

2. 井関智美 (2004) 特養におけるおむつ利用者の心身障害状況とおむつ介護形態の分析. 日本看護研究学会誌、27(2)、77-84.
3. 堤雅恵 (2004) 高齢者の QOL をめざしたスキンケア おむつを常用している高齢者の皮膚感覚の維持. 臨床看護、30(8)、1231-1217.
4. 奥井仁 (2001) おむつ交換に関する細菌学的検討. 看護実践の科学、26(10)、77-79.
5. 鶴岡洋子・久保田貴代恵・井上景子 (2004) 尿臭・便臭ブロック対策. 臨床看護、30(8)、1232-1235. 引用文献として採用.
6. 山崎節美・中野千登世・原田愛他 (2004) 尿意伝達困難患者のおむつのあて方と時間の検討. 臨床看護、30(8)、1222-1231.
7. 萩野浩 (2004) おむつ交換時の骨折をどう防ぐ. Expert Nurse、20(9)、18-19.
8. メジカルフレンド社.
9. Rigby, D. (2003) Manual evacuation of faeces. Nursing Times, 99(1), 48.
10. 下高原理恵・柴田興彦・島田達生 (2001) 浣腸・摘便技術の基礎となる直腸・肛門管の形態. 日本看護研究学会雑誌、24(3)、107.
11. Timby, B. K (1996) Fundamental Skills and Concepts in Patient care 6th Edition. Philadelphia : Lippincott.
12. 薄井担子 (1988) 看護のための人間論 ナースが視る人体. 講談社.
13. 山川裕美子・本多正俊 (2003) 摘便による苦痛を減少させる試み—肛門周囲指圧マッサージの有効性—. 日本看護研究学会雑誌、26(3)、337.
14. 宮原伸二 (2001) 特別養護老人ホームにおける介護職が行う「医療と介護の接点と思われる行為」の現状と課題. プライマリ・ケア、24(1)、26-33.
15. 吉利和・三辺謙・和田武雄監修 (1988) からだの科学増刊 5 新・病態生理学読本. 日本評論社.

【浣腸】

1. 水島裕監修 (1996). 疾患・症状別 今日の治療と看護. 南江堂.
2. 森山信夫・伊藤一元・大坪良他 (1979) グリセリン浣腸によって発症したと思われた急性腎不全の1例. 腎と透析、7(3)、89-94.
3. 奥宮暁子・坂田三允・藤野彰子 (1996) 症状・苦痛の緩和技術. 中央法規.
4. 武田利明・石田陽子・川島みどり (2003) グリセリン浣腸液と溶血に関するラットを用いた実験研究—静脈内投与による溶血誘発について—. 日本看護研究学会雑誌、26(4)、81-88.

【摘便】

1. 川島みどり・数間恵子・太田勝正他 (2002) 日本看護科学学会看護学学術用語検討委員会 (第6期) 委員会報告書 生活行動への直接的援助に関する領域の用語検討結果.
2. Hogston, R & S, Penelope M (1999) Foundations of Nursing Practice. New York : Palgrave.
3. 細田かず子 (2002) 診療・処置の援助技術 摘便. 看護技術、48(5)、127-128.
4. 小田嶋梧郎 (2001) からだの機構 第4

【ストマ造設者のケア】

1. 穴澤貞夫編 (2000) 実践ストーマ・ケア 臨牀看護セレクション10. へるす出版.
2. Hogston, R. & Simpton, P. (1999) Foundation of Nursing Practice. New York : Palgrave.
3. 伊藤美智子 (2003) Nursing Mook 15 ストーマケア. 学研.
4. Smith, S., Duell, D., & Martin, B. (1996) Clinical Nursing Skills Basic to Advanced Skills (4th ed.). Stamford : Appleton & Lange.
5. 高屋通子・高橋のり子 (2004) 人工肛門・人工膀胱の知識 腸や膀胱のない人の快適なくらしのために第2版. 学研.
6. Timby, B (1996) Fundamental Skills and Concepts in Patient Care (6th ed.). Philadelphia : Lippincott.

【導尿】

1. 宇佐美隆利他 (1996) 間欠的自己導尿患者における尿路感染症の検討. 日本科学療

- 法学会雑誌、44(12)、874-878.
2. 江上直美他 (1999) 導尿・膀胱留置カテーテル挿入患者の看護：その合併症と予防. 看護技術、(45)11、44-49.
 3. 折笠精一他 (1991) カテーテル留置および間欠自己導尿と尿感染. 日本泌尿器科学雑誌、82(11)、1807-1816.
 4. 鎌田直子 (2003) 間歇的自己導尿の手技習得に関する聞き取り調査. 日本小児泌尿器学会誌雑誌、12(2)、97-99.
 5. 小林裕美他 (2003) 自己導尿を行なう患者における導入時からの心理的变化およびそれに影響を及ぼす背景について. 看護研究、36(1)、53-64.
 6. 阪本恵子他 (1989) 行動形成プログラム. 廣川書店.
 7. 田島純子他 (2003) 自己導尿患者における精神状態と Quality of life についての検討. 日本排尿機能学会誌、14(2)、223-227.
 8. 西澤尊子 (2002) 診療・処置の援助技術導尿. 看護技術、48(5 臨増)、566-568.
 9. 日比初紀他 (1999) 導尿・膀胱留置カテーテル挿入の適応と施行基準. 看護技術、(45)11、39-43.
 10. 古畑哲彦他 (1990) 排尿困難を有する患者に対する間欠性自己導尿. 医療、44(9)、912-916.
 11. 山崎雄一郎他 (2001) 自己導尿親水性カテーテルキットの開発. 日本泌尿器科学雑誌、92(5)、56-565.
 12. 吉川裕康他 (1991) 間歇的自己導尿患者における尿路感染の検討. 泌尿器外科、4(12)、1285-1289.
- 【膀胱内留置カテーテル法 (挿入と管理)】**
1. 井開孝夫他 (1991) フォーリー導尿バルーンカテーテルにおよぼす潤滑剤の影響について. 日本手術医学会誌、12(1)、128-130.
 2. 石原弘子 (2004) 業務改善アプローチによる尿路感染予防. INFECTION CONTROL、13(6)、96-98.
 3. 井上都之他 (1999) 膀胱留置カテーテル装着患者の尿路感染成立と影響する因子についての検討. 看護研究、32(4)、45-53.
 4. 井口ゆき枝他 (1999) 尿路カテーテル留置中の患者の感染予防—尿路感染防止に効果的な陰部ケアの検討—. 看護の研究、31、181-183.
 5. 植山奈実他 (2000) ぼうこう留置カテーテルによるラテックスアレルギーの1例. 日本小児科学会誌、104(2)、174.
 6. 折笠精一他 (1991) カテーテル留置および間欠自己導尿と尿感染. 日本泌尿器学会雑誌、82(11)、1807-1816.
 7. 門田晃一他 (2003) バイオフィルムの臨床的意義. 腎と透析、55(1)、53-57.
 8. 叶谷他 (2004) 尿路留置カテーテルと蓄尿バッグの交換頻度に対する病棟内基準と看護職の交換の実際. 日本看護研究学会雑誌、27(1)、101-105.
 9. 小林妙子他 (2004) 石鹸、微温湯を用いた陰部ケアのカテーテル関連尿路感染症予防の有効性. 大阪市立大学看護短期大学紀要、6、17-21.
 10. 齊藤華他 (1999) 導尿・膀胱留置カテーテル挿入と膀胱洗浄の基本手技. 看護技術、(45)11、10.
 11. 阪本恵子他 (1989) 行動形成プログラム. 廣川書店.
 12. 佐藤重仁他 (1982) 尿道留置カテーテルの欠陥で緊急手術となった1例. 麻酔、31(7)、764-766.
 13. 戸ヶ里他 (2004) 尿路感染予防のための尿路カテーテル管理—外尿道口ケアに関する文献検討. 日本看護研究学会雑誌、27(1)、115-123.
 14. 豊田佳隆他 (1989) キシロカインゼリーR ショックの1症例. 臨床麻酔、13(4)、566.
 15. 仲田浄治郎他 (1996) 親水性銀コーティングフォーリーカテーテル (ダブルキャス) の使用経験. 泌尿器科紀要、42(6)、433-438.
 16. 西澤尊子 (2002) 診療・処置の援助技術導尿. 看護技術、48(5 臨増)、566-568.
 17. 村上剛他 (2004) 尿道カテーテル留置により発症したラテックスアレルギーの1症例. 麻酔、53(6)、675-678.
 18. 宮北英司他 (1989) 尿道口消毒剤についての比較検討—グルコン酸クロルヘキシジンとポピドンヨード—. 泌尿器外科、2(8)、

853-854.

19. 矢野邦夫監訳 (2003) カテーテル関連尿路感染症予防ガイドライン～CDC ガイドライン～ (Guideline for Prevention of Catheter-associated Urinary Tract Infections, 1982). メディコン.
20. 山田他 (2001) 尿路感染予防のための科学的根拠に基づいたケアの検討—尿路カテーテル装着患者に対する日常的な尿道口ケアの実態—. INFECTION CONTROL, 10 (9)、94-101.
21. 山本徳則他 (1999) 脊損患者における塗銀抗菌尿路留置カテーテルの有用性の検討. 泌尿器外科, 12(12)、1451-1454.

* 清潔・衣生活援助技術に関する文献

【入浴介助】

1. 岡田淳子 (2002) 清潔ケアのエビデンス—入浴・清拭—. 看護技術, 28(13)、1959-1970.
2. 奥田康子・金野朋美・青山百合絵ほか (1997) 循環・呼吸機能に対する清拭とシャワー浴の影響の比較. 看護技術, 43(7)、97-102.
3. 加藤ゆみ (2000) 温水浴が脳梗塞既往者の止血機能および自立神経機能に与える影響. 愛知医科大学医学会雑誌, 28(2)、127-142.
4. 川本龍一 (2000) 寝たきり患者の温浴による血圧、動脈血酸素飽和度への影響. Jpn. J. Prim. Care, 23(2)、142-145.
5. 川本龍一・岡本憲省・山田明弘他 (1998) 寝たきり患者の血圧に及ぼす温浴効果の検討. 日老医誌, 35、299-302.
6. 服部恵子・山口瑞穂子・鈴木淳子他 (2002) 看護技術を支える知識に関する一考察—身体の清潔に関する文献を通して1992-2000 (第1報). 順天堂医療短期大学紀要, 13、59-70.
7. 濱昌代・生田宗博・北方理恵他 (2004) 脳卒中片麻痺患者の入浴動作と障害の程度との関係. 作業療法, 23(1)、45-53.
8. 藤井謙治・木村悦博・中村誠 (2000) 生理的反応による介護用シャワー装置の評価. 人間工学, 36(5)、273-278.
9. 石井利枝 (2001) 浴槽内心電図装置で観

察した冠動脈疾患患者の入浴中心電図と心拍変動. 東女医大誌, 71(3)、155-165.

10. 道広和美・竹森利和・稲盛義雄 (2000) 入浴時の動作に伴う血圧・脈拍数の変動. 生理心理, 18(3)、205-217.
11. 美和千尋・岩瀬敏・小出陽子他 (1999) 入浴時の浴室温が循環動態と対応調節機能に及ぼす影響. 総合リハビリテーション, 27(4)、353-358.
12. 美和千尋・岩瀬敏・小出陽子他 (1997) 40度C入浴20分間によるヒトの生理的变化と心理的变化の関係. 総合リハビリテーション, 25(8)、737-742.
13. 美和千尋・杉村公也・川村陽一他 (2002) 40度C入浴時の循環動態と体温調節機能の変化における加齢の影響. 日温気物医誌, 65(4)、187-193.
14. 橋木晶子・長弘千恵・長家智子他 (2004) 入浴中の循環動態の変化に関する基礎的研究—高齢者を対象に—. 日循予防誌, 39(1)、9-14.
15. 植竹篤志・村田厚夫 (2002) 事象関連電位 (ERP) を用いた入浴の精神疲労回復効果の評価. 人間工学, 38(2)、112-118.

【洗髪】

1. 遠藤健司・伊藤広一・市丸勝二他 (2000) 美容院洗髪動作後に発生した頸性めまいの検討. 日本脊椎外科学会, 11(1)、168.
2. 加藤圭 (1998) 安静臥床を要する入院患者の洗髪に対する基礎研究Ⅱ—頭皮表面の常在菌と頭部の楽屑量および自覚症状との関係—. 米子医誌, 49、45-56.
3. 橋口・井上紀子・石橋圭太他 (2001) 洗髪代使用時における洗髪動作が生理心理反応に及ぼす影響—洗髪体位の違いによる検討—. 日本生理人類学会誌, 6(2)、57-95.
4. 深田順子・米澤弘恵・石津みえ子他 (1998) 椅子前屈位洗髪時における筋負荷. 日本看護研究学会誌, 21(2)、29-37.
5. 伊丹君和・藤田きみえ・久留島美紀子他 (2003) 洗髪作業における看護者の腰部負担研究—ボディメカニクス活用の有無を中心とした検討. 日本看護研究学会雑誌, 26(3).
6. 石井範子・千田富義・戸井田ひとみ他

- (1993) ケリーパード洗髪における補助具の効果. 日本看護研究学会誌、17(1)、43-48.
7. 木子り瑛・谷口まり子・松尾祐子他 (2003) 入院患者の洗髪のニードに関する研究. 熊本大学教育学部紀要、52、83-89.
 8. 加藤圭子・深田美香 (2000) 洗髪援助に関する実験的検討 頭部の皮脂と自覚症状について. 鳥取大学医療技術短期大学部紀要、32、67-76.
 9. 工藤綾子・小川妙子・稲富恵子 (2001) 高齢患者の頭髮細菌汚染状況と感染予防を目的とした洗髪方法の検討. 順天堂医療短期大学紀要、12、46-54.
 10. 松本比佐江・津田紀子・久次米健市他 (1989) 洗髪の循環代謝系に及ぼす影響に関する研究—湯の温度差による検討—. 神大医短紀要、5、161-166.
 11. 沼田香織・工藤せい子・津島律 (1990) 前屈位洗髪における貧血患者の脈拍・呼吸・血圧. 日本看護研究学会誌、13(1)、63-72.
 12. 野月千春・田中祐二 (2000) 援助技術の文献レビュー(3). Nursing Today、15(8)、72-75.
 13. 鈴木幸子・土居洋子・東真美 (2001) パルスオキシメトリーによる慢性呼吸不全患者の入浴労作の検討. 大阪府立看護大学紀要、7(1)、1-8.
 14. 坂田五月・野村志保子・石塚淳子他 (2003) 洗髪手技の違いによる生体反応・主観的反応の比較. 日本看護学会誌、12(1)、50-59.
 15. 佐藤恵美・福山景子・正木幸美他 (2003) 呼吸器疾患患者に適した洗髪体位の検討. 日本呼吸管理学会誌、13(1)、140.
 16. 寺町優子・早川芳美・佐々木登久美・沼田香織 (1998) 洗髪労作が血液疾患患者に与える影響—体温、血圧、心拍数およびRPRの変化を中心として—. 東京女子医科大学看護学部紀要、1、1-6.
 17. 寺町優子 (1982) 急性心筋梗塞患者の日常生活労作におけるリハビリテーション<その3>—洗髪および徒歩労作時におけるRPRの変化と看護への応用. 看護技術、28(12)、129-135.

【清拭】

1. 菱沼典子・大久保洋・川嶋みどり (2002) 日常業務の中で行われている看護技術の実態. 日本看護技術学会誌、1(1)、51-55.
2. 深田美香・宮脇美保子・高橋弥生他 (2003) 石鹸清拭の効果的な方法に関する検討—石鹸の泡立てによる石鹸成分の除去効果について—. 日本看護研究学会雑誌、26(5)、169-178.
3. 松田たみ子・斉藤やよい・小泉恵 (1995) 清潔への援助技術. ナーシング・トゥデイ、10(5).
4. 中村久美子・今留忍・谷口珠美他 (2000) 清拭時の摩擦方向が四肢の循環に及ぼす影響について. 20(9)、148-153.
5. 安ヶ平伸枝 (2003) 清潔時の拭く方向と自律神経反応. 平成14年度分担研究報告書、看護技術の効果を裏付ける科学的根拠の探求、54-56.
6. 松村千鶴・田中輝和 (2003) 清拭における温熱刺激および摩擦刺激が心身に及ぼす影響—熱布貼用と熱布清拭の比較—. 香川医科大学看護学雑誌、7(1)、21-32.
7. 中野栄子・細野貴美子 (1996) 清拭技術の巧拙が皮膚温に及ぼす影響について. 鹿児島大学医療技術短期大学紀要、6、57-65.
8. 西田祐紀子・工藤せい子・阿部テル子 (2002) 高齢者における清拭・入浴時の皮膚pH. 看護技術、49(9)、103-108.
9. 岡田淳子 (2002) 清潔のエビデンス—入浴・清拭—. 臨床看護、28(13)、1959-1969.
10. 月田佳寿美・宮崎徳子・長谷川智子他 (2002) 清拭における石鹸の使用の違いによる皮膚表面への影響—皮膚表面解析、皮膚角層水分量、皮膚pHを指標として—. 福井医科大学研究雑誌、3(1)、31-38.
11. 山崎美恵子 (1996) 明解看護学双書2 基礎看護学Ⅱ. 金芳堂、159-167.
12. 山本敬子・菅屋潤氣・加藤雅子・佐藤麻紀 (2003) 室温の違いによる背部清拭が皮膚温、鼓膜温および温熱感覚に及ぼす影響. 日本生理人類学会誌、8(4)、63-69.
13. 百合純子・藤井徹也 (2003) 洗浄を取り入れた清拭の効果について. 看護技術、36(3)、67-81.

【足浴】

1. 小松浩子・菱沼典子 (1998) 看護実践の根拠を問う. 南江堂.
2. 小玉香津子他編 (1995) 看護の基礎技術 I. 学習研究社.
3. 高橋香名・布施淳子 (2003) 糖尿病性末梢神経障害患者の自覚症状に対する足浴の効果について. 第34回日本看護学会集録; 成人看護Ⅱ、135-137.
4. 玄田公子: 足浴の生体に及ぼす影響. 滋賀県立短期大学学術雑誌、20、112-115.
5. 香春知永 (2004) 看護実践をとおした看護技術の根拠の学びを援助する—臨地実習で足浴技術の患者への適用を学ぶ. 看護展望、29(8)、88-94.
6. 服部恵子・山口瑞穂子・島田千恵子・永野光子他 (2003) 看護技術を支える知識に関する一考察; 足浴に関する文献を通して 1992-2001. 順天堂医療短期大学紀要、14、139-150.
7. 西田直子 (2002) 清潔ケアのエビデンス—足浴と生体反応—. 臨床看護、28(13)、1971-1983.
8. 山田昌代・助信わかな・村田和弘 (2002) 褥瘡患者の足浴効果についての検討. 第33回日本看護学会集録; 総合看護、74-76.

【爪切り】

1. 宮川晴妃 (2003) メディカルフットケアの技術. 日本看護協会出版会.
2. 岡本幸市・佐々木富男・木暮聡子編 (2001) 脳血管障害の治療と看護. 南江堂.

【整髪】

1. 岡本幸市・佐々木富男・木暮聡子編 (2001) 脳血管障害の治療と看護. 南江堂.

【手浴】

1. 小松浩子・菱沼典子 (1998) 看護実践の根拠を問う. 南江堂.
2. 小玉香津子他編 (1995) 看護の基礎技術 I. 学習研究社.

【陰部洗淨】

1. 佐々木真紀子・大島弓子・滝内隆子 (1998) 特集ケア技術アトラス 清潔 陰部

洗淨. 臨床看護、24(13)、1905-1090.

2. 弥富裕子・山口みゆき・本山麻里子他 (2003) 逆行性尿路感染予防に対する洗淨液の検討—竹酢液を用いた陰部洗淨の効果. 第34回日本看護学会集録; 成人看護Ⅰ、88-90.
3. 小松浩子・菱沼典子 (1998) 看護実践の根拠を問う. 南江堂.

【口腔ケア】

1. Buglass EA (1995) Oral hygiene, Br J Nurs, 4(9), 516-19.
2. Holmes S (1996) Nursing Management of oral care in older patients. Nurs Times, 92(9), 37-9.
3. 柿木保明編著 (2000)、高齢者特有の口腔症状がよくわかる 臨床オーラルケア c. 日総研出版.
4. Ohno T, et al (2003) Improvement of taste sensitivity of the nursed elderly by oral care, J Med Dent Sci, 50(1), 101-107.
5. 佐藤由美 (2003) たかが口腔ケア、されど口腔ケア!?. 看護教育、44(9)、764-768.
6. Yonezawa H, et al (2003) Effects of tongue and oral mucosa cleaning on oral Candida species and production of volatile sulfur compounds in the elderly in a nursing home, J Med Dent Sci, 50(1), 1-8.

【寝衣交換】

1. 猪又美栄子他 (1996) 衣服設計からみた加齢による運動機能の変化. 昭和女子大学学苑、684、134-141.
2. 猪又美栄子・中村亜矢子 (1997) 高齢女性の袖口ボタンかけはずし動作. 日本家政学会誌、48(6)、531-537.
3. 岡田宣子 (2000) 高齢者の衣生活行動の現状と要望点—被服の調達と選択行動を中心として—. 日本家政学会誌、51(7)、595-603.
4. 岡田宣子 (2000) 高齢者に加齢に伴い生じる身体機能の変化と被服に求められる要件. 日本家政学会誌、51(9)、817-824.
5. 岡田宣子 (2004) 高齢者服設計のための

基礎研究—高齢者の脱ぎやすい衣服ゆとり量—。日本家政学会誌、55(1)、31-40。

6. 小椋順子 (1996) 高齢者寝衣の実態調査。滋賀県立短期大学学術雑誌、49、59-67。
7. 片本恵利他 (2000) 高齢者のためのファッションセラピーへのアプローチシルバーファッションショー出演者の被服に関する意識。繊維機械学会誌、53(6)、254-258。
8. 川口順子・村上かおり (2003) 高齢者の衣生活支援のための基礎研究—下衣の製作について—。高知女子大学紀要生活科学部編、52、11-19。
9. 佐々井啓編著 (2002) シリーズ〈生活科学〉衣生活学。朝倉書店。
10. 佐々井啓編著 (2004) 社会福祉専門職シリーズ〈介護福祉士編〉家政学実習ノート [第3版]。誠信書房。
11. 中里喜子 (2003) 『衣料医学』としての装い—ドイツの医学誌から—。日本衣服学会誌、46(2)、21-24。
12. 中野慎子他 (1982) 寝衣に関する消費調査。衣服学会雑誌、25(2)、21-27。
13. 中橋美智子・森悦子 (1994) 高齢者の衣服に関する研究—体力・手指の巧緻性と衣服着装と関係—。日本衣服学会誌、38(1)、17-23。
14. 二宮彩子他 (2004) 根拠にもとづいた基礎看護技術 寝衣交換。クリカルスタディ、25(9)、30-35。
15. 福本富美子・中谷和 (1979) 老人衣服の保湿度に関する衛生学的研究。衣服学会雑誌、22(1.2)、26-32。
16. 見寺貞子 (2000) 高齢者のためのファッションセラピーへのアプローチ ファッションにおけるユニバーサルデザイン高齢者・身障者のためのファッションショーの企画と評価。繊維衣服学会誌、53(6)、244-253。

*与薬の援助技術に関する文献

【内服】

1. 川村治子 (2003) ヒヤリ・ハット11,000事例によるエラーマップ完全本。医学書院。
2. 川村治子 (2001) 厚生科学研究費補助金「医療のリスクマネジメントシステム構築に関する研究」(平成11年～13年度)。

【筋肉注射】

1. 岩本テルヨ・芳賀百合子・山田美幸 (2002) 注射技術のエビデンス。臨床看護、28(13)、2034-2050。
2. 武田利明 (2004) 筋注用薬剤が皮下組織に投与された場合の安全性に関する実験的研究。日本看護技術学会誌、3(1)、66-70。
3. 菊池和子・高橋有里・三浦奈津子 (2004) 筋肉内注射の注射針刺入深度。日本看護技術学会、3(1)、35-37。
4. 半田聖子・大串靖子・今充 (1981) 確実な皮下注射・筋肉注射に関する一考察。看護研究、14(4)、43-50。
5. 中谷壽男・稲垣美智子・須釜淳子他 (1999) 三角筋への筋肉内注射；腋窩神経を損傷しないための適切な部位。金沢大学医学部紀要、23(1)、83-86。
6. 高橋みや子・根本良子・石井トク他 (1988) CT 写真解析による注射部位の検討。日本看護科学学会誌、8(3)、128-129。
7. 深井喜代子・大名門裕子 (1992) 注射に対する看護的除痛法の効果の実験的検討。日本看護研究学会雑誌、18(3)、47-55。
8. 武田利明・石田陽子 (2003) ラットおよびウサギを用いた筋肉注射の安全性に関する実験的研究。岩手県立大学看護学部紀要、5、93-96。
9. 高橋有里・菊池和子・三浦奈津子 (2003) 筋肉注射の実態と課題—看護職者へのアンケート調査より—。岩手県立大学看護学部紀要、5、97-103。
10. 長谷川洋子・渡邊順子 (2001) 基礎看護技術教育における三角筋筋肉注射部位の解剖学的検討。日本看護研究学会雑誌、24(3)、296。
11. B.K.Timby (1996) Fundamental Skills and Concepts in Patients Care, Sixth Edition, Lippincott.
12. 森下晶代・中田康夫・坂本智華他 (2002) マッサージによる筋肉注射時の痛みの軽減。看護研究、35(3)、11-17。
13. 良村貞子・一條明美 (2002) 医療過誤と看護師の責任。総合看護、37(4)、17-27。
14. 香春知永・池亀俊美 (2001) 看護技術の再構築教科書チェック特別編筋肉注射(1)。Nursing Today、16(8)、66-69。

15. 水戸優子・花里陽子 (2001) 看護技術の再構築教科書チェック特別編筋肉注射(2). Nursing Today、16(9)、64-68.

【皮下注射】

1. 岩本テルヨ・芳賀百合子・山田美幸 (2002) 注射技術のエビデンス. 臨床看護、28(13)、2034-2050.
2. 半田聖子・大串靖子・今充 (1981) 確実な皮下注射・筋肉注射に関する一考察. 看護研究、14(4)、43-50.
3. 羽倉稜子・西澤由美子 (1999) インスリン注射は服の上からでも安全. Expert Nurse、15(4)、36-38.
4. 赤石英 (1972) 安全な注射部位について. 看護学雑誌、36(11)、1520-1523.

【皮膚塗布】

1. 森田孝子編集 (2004) スキルアップとトラブル解決. メヂカルフレンド社.
2. 川村治子 (2003) ヒヤリ・ハット11,000事例によるエラーマップ完全本. 医学書院.

【皮膚貼付】

1. 鳥山光代 (1997) 経皮吸収薬についてのアンケート調査. 愛知県病院薬剤師会雑誌、25(4)、49-52.
2. 橋本京子・峯岸祥子・飯塚敏美他 (1996) 心疾患治療テープ剤の使用に関する検討. テープ剤の使用感に関する患者アンケート. クリニカルファーマシー、48、51-55.
3. 塚本均・井上祐一・大久保堯夫 (2002) 全身性経皮吸収剤におけるヒューマンエラー防止のための人間工学的アプローチ. 安全工学シンポジウム講演予稿集、32、150-151.
4. 伊藤正俊 (1999) 皮膚疾患を起こす化学物質・金属類 貼付剤フランドルテープなどを含む. 皮膚病診療、21、118-121.
5. 齋藤宗靖 (1998) 経皮吸収型・虚血性心疾患治療剤フランドルテープSの市販後臨床成績調査結果 全国176施設、855例の集計解析. 診療と新薬、35(6)、588-598.

【直腸内与薬】

1. 森田孝子編集 (2004) スキルアップとトラブル解決. メヂカルフレンド社.

2. 川村治子 (2003) ヒヤリ・ハット11,000事例によるエラーマップ完全本. 医学書院.
3. 岩田恵子・日永田恵美・久門裕子 (2003) ボルタレン坐薬により血圧低下を来しやすい患者の状態 食道癌手術後における検討. ICUとCCU、27(2)、159-165.
4. 齋藤尚子・長谷川正志・星野悦子他 (1995) ボルタレン坐薬における血圧の変動についての検討. ICUとCCU、19(2)、179-182.
5. 中尾安秀・鈴木厚・小花光夫他 (1996) 坐薬によって伝染したと思われる腸チフスの親子感染例. 感染症学雑誌、70(5)、496-499.
6. 小長谷百絵・大久保祐子・小川鉦一 (2003) 坐薬の自己挿入に関する研究、高齢者の適切な自己挿入方法の検討. 東京女子医科大学看護学部紀要、6、11-19.
7. 佐藤美枝・吉野珠美・日暮久美子 (1996) 慢性関節リウマチ患者が床上使用できる坐薬挿入器の考案. 看護実践の科学、21(5)、6-7.

【点眼】

1. 佐渡一成 (2003) 点眼容器識別の新しい試み. 日本眼科紀要、54(8)、647-651.

【輸液ポンプ】 【シリンジポンプ】

1. 村上美好監修 (2004) 写真でわかる臨床看護技術. インターメディカ.
2. 小西俊郎編著 (2001) N-books 2 輸液管理の新しい知識と方法. メディカルフレンド社.
3. 川村治子編 (2001) JJN スペシャル no. 70 注射・点滴エラー防止「知らなかった」ではすまない! 事故防止の必須ポイント. 医学書院.
4. 橋本廸生 (2002) 医療安全ハンドブック 2 ヒヤリ・ハット報告の分析と活用. メヂカルフレンド社.
5. 別府宏國 (2003) 静脈注射剤漏出の危険性—フェニトイン漏出事故の教訓. Nursing Today、18(2)、42-45.

【点滴静脈内注射】【中心静脈栄養】【静脈内注射】

1. 村上美好監修 (2004) 写真でわかる臨床看護技術. インターメディカ.
2. 小西俊郎編著 (2001) N-books 2 輸液管理の新しい知識と方法. メディカルフレンド社.
3. 川村治子編 (2001) JJN スペシャル no. 70 注射・点滴エラー防止「知らなかった」ではすまない! 事故防止の必須ポイント. 医学書院.
4. 橋本廸生 (2002) 医療安全ハンドブック 2 ヒヤリ・ハット報告の分析と活用. メディカルフレンド社.
5. 小西和世・宮崎歌代子・平林勝政 (2001) 点滴静脈注射ミス事件 (その1). 看護管理、11(4)、236-309.
6. 小西和世・宮崎歌代子・平林勝政 (2001) 点滴静脈注射ミス事件 (その2). 看護管理、11(5)、388-392.

* 感染予防の援助技術に関する文献

【医療廃棄物の取扱】

1. 小林寛伊・細渕和成共著 (1992) 医療廃棄物・誤刺による感染防止対策、廣川書店.
2. 感染症廃棄物処理対策検討会：廃棄物処理法に基づく感染性廃棄物処理マニュアル、平成16年3月、環境省ホームページ <http://www.env.go.jp>.

【防護用具の着用】

1. 向野賢治訳・小林寛伊監訳 (1996) 病院における隔離予防策のための CDC 最新ガイドライン 第1版. メディカ出版.
2. 大久保憲訳・小林寛伊監訳 (2003) 医療現場における手指衛生のための CDC ガイドライン.
3. 福島ミネ監修 (1997) 看護技術グラフィックガイド. メディカルフレンド社.
4. 柴田清監修 (2004) 医療関連感染の防止対策. 医学芸術社.

【スタンダードプリコーション、手洗い】

1. 向野賢治訳・小林寛伊監訳 (1996) 病院における隔離予防策のための CDC 最新ガイドライン 第1版. メディカ出版.

2. 大久保憲訳・小林寛伊監訳 (2003) 医療現場における手指衛生のための CDC ガイドライン.
3. 厚生省健康政策局指導課監修. 小林寛伊 (2000) 院内感染対策テキスト 第4版. へるす出版.
4. 小林寛伊編集 (1999) 増補消毒と滅菌のガイドライン. へるす出版.
5. 川島みどり編 (1997) 「Check it up ③ 日常ケアを見直そう」. 医学書院、136.
6. 広瀬千也子 (1994) 流水手洗いは感染防止の基本—イギリスで見たもの—. Expert Nurse、10(7).
7. Sartor C, et al. (2000) Nosocomial *Serratia marcescens* infections associated with extrinsic contamination of a liquid nonmedicated soap. Infect Control Hosp Epidemiol, 2000, Mar, 21(3), 196-9.
8. Taylor, L. J. (1978) An evaluation of handwashing techniques-1. Nursing Times, 74(1), 54.

【無菌操作】

1. 渋谷美穂 (2003) 滅菌物を清潔に取り扱うことができますか?. 臨床看護、29(3)、381-387.
2. 杉浦悦子他 (1999) 滅菌バックの取り扱い方法について～滅菌物取り出し方法の差異による器械板の清潔度の保持～. 日本看護学会論文集 看護総合、17.
3. 玉木ミヨ子他 (2001) 基礎間技術における CAI プログラムの開発—無菌操作 (その1)—. 埼玉医科大学短期大学紀要、12、77-87.
4. 玉木ミヨ子他 (2003) 基礎看護技術における CAI プログラムの開発—無菌操作 (その2)—. 埼玉医科大学短期大学紀要、14、41-54.
5. 内藤寿喜子他 (2000) 新版看護学全書 第13巻基礎看護学2. メディカルフレンド社.
6. 中西睦子・大石実編著 (2002) 看護・医学事典 <第6版>. 医学書院、883.
7. 村上美好監修 (2004) 写真でわかる臨床看護技術. インターメディカ.